# わたしの居場所

## 性的少数者

# 安心して学べる環境に

## 大学内にセンターを開設

木々に囲まれた東京都国立市の一橋大。研究棟の一角に、その部屋はある。小さな丸テーブルとクッションが置かれ、本棚には性の多様性に関する書籍が並ぶ。新型コロナウイルス感染症の影響でまだオープンしていないが、LGBTなど性的少数者らの居場所となる「プライドフォーラムリソースセンター」だ。

6年前の学内での事件をきっかけに、同大と卒業生が共同で開設した。中心になったのは、LGBTとその理解者の交流を進めるNPO法人グッド・エイジング・エールズ（渋谷区）の代表、松中権(44)だ。

### 過去の記憶

2016年8月、松中は電通社員としての仕事で、五輪開催中のブラジル・リオデジャネイロにいた。同性愛者であることを公言しており、次の東京五輪で性的少数者を日本社会にどう認知させるかを考え、「ワクワクしていた」。

だが、日本から飛び込んできたニュースに、過呼吸になるほどの衝撃を受ける。母校の一橋大で15年、ゲイの大学院生の男性が転落死した。LINEの友人グループで、同級生からゲイだとアウティング（暴露）された後の出来事だった。

記事を読むうち、松中に「モノクロの日々」の記憶がよみがえった。

金沢市の保育園に通っていた頃、気になる男子がいた。自分が何者か分かったのは、小学生時代にテレビで、お笑い芸人が演じるゲイのキャラクターを見た時。からかわれる存在であるとも気付いた。こっそり辞書で「同性愛」を調べると、「異常性愛」の文字。「世界がモノクロに変わった。絶対にばれてはいけないと思うようになった」

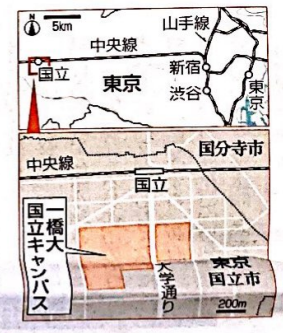
東京・新宿2丁目の老舗ゲイバーを引き継いだ松中権。「新しい居場所になれば」と話す

一橋大の前で本田恒平（右）と山口紗英。新型コロナウイルス感染予防で学内への入場が制限されているため、死亡した男性の命日には、追悼する動画をインターネットで発表した＝2020年、東京都国立市

一橋大法学部に入り、ホッケー部に所属した。チームメートがゲイをネタにした話で盛り上がると、動揺を悟られないよう、率先して笑った。

亡くなった男性もアウティング直後、ちゃかすような言葉を返信していた。頭をフル回転させ、お調子者を演じていた過去の自分に重なった。

「彼は僕だった。人間関係やタイミングが少しでも違えば、僕も死に至っていた。当事者は綱渡りの生活を送っているのが日本の現実。自分は何をしてきたのか」。松中は16年勤めた電通を辞め、グッド・エイジング・エールズの活動に専念することを決めた。




### 本当の自分

松中は19年、一橋大卒業生の有志で、性的少数者の問題を考える任意団体を設立。同大ジェンダー社会科学研究センターも「差別なく学べる環境づくりが必要」と考えており、共同事業を始めた。

性的少数者を巡る課題を学ぶ連続講座の開催とともに、力を入れたのが、プライドフォーラムリソースセンターの開設だ。悩みを抱く当事者も、その理解者も、性の多様性を学びたい学生も、安全に過ごせる場所を目指す。

松中が念頭に置くのは、大学4年の冬から留学したオーストラリア・メルボルン大の「クイアルーム」。多様な性を象徴するレインボーフラッグが飾られ、当事者も理解者も自然に過ごしていた。松中が意を決して部屋を訪ね、ゲイだと告白すると、他の学生から「彼氏はいるの」と自然に聞かれた。「ようやく本当の自分になれた瞬間だった」と振り返る。

### 変化を促す

プライドフォーラムリソースセンターの運営は学生が担う。代表の大学院修士課程2年、本田恒平(26)は留学先で、亡くなった男性の妹と知り合った。「縁を感じた」。一昨年の男性の命日には大学当局と交渉し、献花台を設置。遺族を連れてきた松中から、声を掛けられた。

学部3年の山口紗英(22)は性的少数者だ。高校生の頃、性的少数者についての入門書を手に取った。「女性は結婚して出産するもの」といった周囲の価値観に対し、「理論武装して、闘ってきた」。

性的少数者とは、同性愛のゲイ、レズビアン、両性愛のバイセクシュアル、出生時の性と自認する性が異なるトランスジェンダーの人らを指す。英語の頭文字を取ってLGBTなどと呼ばれることもある。

性的少数者にとって、性的指向や性自認を本人の同意なく暴露される「アウティング」は、社会生活を崩壊させるほど危険な行為といわれる。宝塚大の日高庸晴教授が当事者1万人余りに実施した調査では、約25%が経験。自治体や企業に対策を求める声が上がっている。

### 4人に1人が暴露被害

昨年6月に施行された国の女性活躍・ハラスメント規制法の指針でも、アウティングはパワハラの一類型に定められた。

センターに携わるきっかけは、共同事業の開始イベントで、松中の講演を聴いたこと。「つながることのできる場所が必要」との言葉に「これだ」とすぐに手を挙げた。

その直前、性の在り方に悩む知人から、相談を受けた。山口が自らのことを伝えると、「自分のような人間は、この世で1人だと思っていた」と言われた。「孤独や不安を抱える人のために、つながりをつくることが必要だと気付いた」と振り返る。

本田も山口も「尊敬できる友人に出会えた一橋大が好き。だからこそ、誰もが安心して学べるキャンパスにしたい」と口をそろえる。

事件後、国立市はアウティングを禁止する条例をつくった。子どもの頃の松中が衝撃を受けた辞書の「異常性愛」との記述も、もうない。松中は後輩たちに呼び掛ける。「誰かが行動を起こして、変えてくれた。自身が変化を促す存在になることが大事だ」

（敬称略、文＝共同通信社会部記者・三浦ともみ、写真＝同編集委員・堀誠、同写真部記者・中島悠）

CamScannerでスキャン